

きいてくらしやい 昔話

—長岡民話の会—会報第 21 号 平成 26 年 7 月発行—

皆様、お元気ですか？梅雨入りしたはずなのですが暑い日が続いていますね。大雨にならないのは良いのですが、田んぼの蛙や畑の野菜が気になる今日この頃。皆様も熱中症に気をつけて元気に夏をお過ごし下さい。さて、会報をお届けします。(千)



☆活動報告と活動予定

日程	内容
12月29日(日)	U×テレビ21「妖怪博士・井上円了」に出演 古沢 史さんの「むじなととつつあ」の語りが放送されました。
1月25日(土)	新年会：アトリウム長岡
4月26日(土)	平成26年度総会 会場：阪之上コミュニティセンター 出席者：25名・委任状：10名
6月1日(日)、2日(月)	第8回民話語り連絡協議会・岩室大会 長岡民話の会 出席者：19名
8月29日(金)、30日(土)	第9回長岡民話百物語 会場：長岡市立中央図書館 講堂(2階)
9月7日(日)、8日(月)	長岡民話の会10周年企画 伝説の地 研修旅行(遠野・東北三陸の旅)

お知らせ



🌸 長岡民話の会 10周年記念冊子を作成します！
仮題“私の民話語り”

- ・×切：9月10日(水)(早めに出して戴くと、とても助かります♪)
- ・字数：自由(長くても、短くても構いません。)
- ・内容：自分が語っている民話(伝説も含む)を一話(語り口調そのまま)その民話の出典やどこからの伝承なのかを明記してください。
また、その民話に対するご自分の思いなども(どんなことでも構いません)お書きください。

※ご質問、ご意見がありましたら、どんどん企画編集担当までお申し出ください。



朝ドラ「ちりとてちん」の再放送があった。その中で徒然亭草若の語る「地獄八景亡者戯」の話が印象深かった。サバの刺身を食べて食当たりで死んだ男が冥土への旅路で伊勢屋のご隠居と再会するところから始まり、三途の川下り、六道の辻、賽の河原、閻魔の庁などおなじみの地獄の風景を主人公が入れ替わりつつ描写し、地獄行きの判決が下った4人の男があれやこれやの手で鬼を困らせる下りまでを描く。

昔話でも山崎正治先生の語る「地獄荒らし」がそれである。医者と山伏と軽業師の3人が死んで、閻魔様の前に出され、生前の自分のやったことを話すが、すべて閻魔様に見透かされ、地獄にやられることになった。初めが剣の山、医者と山伏が困っていると、軽業師が二人を両肩に乗せて、剣の上をひょいひょいと山の上まで渡り切ってしまう。次は釜の中に放り込まれ、煮立った湯の中に入れられると医者と軽業師は困るが、今度は山伏が数珠をじゃらじゃらさせて「火もどし」の術で、ちょうどいい湯加減に替えて湯の中で歌っている。またまたこの状態を家来が閻魔に告げると、閻魔は三人を飲み込んでしまう。閻魔様の腹の中で、融けてゆく姿を救ったのは医者だった。上から降りてきた3本の綱を引くと泣きじょうご、笑いじょうご、怒りじょうごになって、閻魔様はくるくるとかわる感情の起伏に困り果てて、吐きだす。とうとう3人は地獄から追放され、極楽に戻ってくるという筋になっている。

「日本昔話辞典」では「閻魔の失敗」と云う項目が載っている。ここでは3人のほかに鍛冶屋がでて4人となっている。剣の山で、鍛冶屋が剣から鉄の草鞋を作らせ、それで、鉄の草鞋を作らせ、それを履いて剣の山を登ってゆく話が載っている。解説では「伝承例は全国に及び、濃厚な分布がうかがえる。おそらく本話は、旅の職業人によって改作伝播されたものであろう」となっている。

昔話の中の「地獄・極楽」はいろいろな場面で出てくる。粕川クラさんが語った「鬼の笑い」もその一つである。話好きな爺さんが閻魔様の前で極楽にやってほしいと頼むが、生まれてから一度も笑ったことのない、家来の鬼を笑わせたら極楽にやってもいいと条件を出される。爺さんはお安い御用とばかり鬼の耳そばでこそこそ話をする。途端に鬼は大笑いをする。びっくりした閻魔様はそのわけを聞く。鬼を笑わせるには、「来年の話をするとすぐ笑う」というのがオチとなる。あるいは水沢謙一氏の「とんとむかしがあったけど 第2集」に収載されている濁沢の川上利根吉の語った「うそきさざなみ」にも閻魔様が出てくる。嘘をつくと閻魔様から舌を抜かれるという言葉の逆手にとって閻魔様の舌を抜いて地獄を飛び出すという話である。閻魔様、賽の河原、葬頭河婆など死後の世界がたびたび出てくる。この落語や昔話が伝えようとするのは、死の世界も笑い飛ばしてゆくことで、その恐怖から逃れようとするメッセージではないであろうか。



長岡の伝説 (第3回)



たあ
田かき観音

安部 昌江

むかしあったてんがの。

浦（旧越路町浦村）に藤左衛門という正直な百姓が住んでいたてんがの。信仰心が厚く、屋敷内に観音様を祀り、毎日おまいりしていたてんがの。

正嘉2年（1258年）日本中に悪い病気が大流行し、藤左衛門の一家も全部この病気にかかってしまったてんがの。

ちょうど田植え前だったので非常に困って、毎日床の中で仕事の心配をしていたてんがの。すると、ある晩、何者かによって一夜にして藤左衛門の田んぼがきれいにかきならされ、そのうえ、田植えまですませてあったてんがの。

藤左衛門は非常に喜んだども「それにしても、どなたが仕事をしてくださったのだろう」と不思議に思いあちこち聞きに回ったども誰れも知っている者はいなかったと。

観音様に報告しようとお参りに行ったところ、お堂の中は本尊様はじめ奉納の絵馬まで泥だらけになっていたんだが、藤左衛門はこれを見てハッと驚き、

「ああ、もったいない。家の者がみんな病気で寝こんでいるがで、観音様自ら田んぼにおはいりになり、絵馬を使って田をかきならし、苗を植えてくださったのだ」とゆうて手を合わせ、頭をたれて感謝の念仏をとなえたんだと。

それからこの観音様を「田かき観音」というようになったてんがの。

その後、鎌倉の執権、北条時頼が地方行脚のさい、たまたまこの村を訪れ、藤左衛門からこの話を聞いて感激し、田千刈を仏供田として寄進し、藤左衛門には「農人（のうにん）」という姓と帯刀を許したんだと。

江戸時代には立派なお堂があって観音様が安置してあったども、大正時代に浮浪者のたき火の不始末から本堂が火事となった時、当時の主人が身をもって本尊を救い出したので無事であったと。

この仏像は、行基上人の作といわれ、立派なものでずっと農人家でお守りされていたと。それに非常にご利益があると伝えられ、こんな話もあるんだが、

あの太平洋戦争のおり、その当時、農人家の当主“金一郎”が招召され、エトロフへ向かう途中、輸送船が轟沈され四千人乗っていた将兵が海に沈み、六人だけが助かったと。金一郎もその中の一人で「これも観音様が守ってくださったからです」というていたてんがの。

その後、農人家はあとを継ぐ人がなく、あき家になって壊されたので、観音様は旧越路町朝日の朝日寺（ちょうにちじ）に移され、この寺で大事に安置されているてんがの。

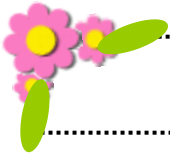
イキガポーンとさけた。

雑談

この伝説に出合って、是非行基上人の作られた観音様に会いたくなり、朝日寺を訪れました。本堂の奥の観音様に手を合わせ拜んでふと顔を上げたら足下が白くなっていて、田んぼの泥がついていたのかな～不思議な気持ちでした。

5月6日。越路の千の森ホールで、地元の浦の皆さんにこのお話をいたしました。農人家からお嫁にこられた方がいらっしやったり、「子供のころ、今はなくなりましたが、祀られていたお堂の所で遊んだものです。」と語ってくださるかたがいらっしやいました。

伝説をその地で語ると、聞いてくださる方もなつかしいと喜んでくださいます。また、語る方も「ああ、やっぱり、本当にあったことなんだなあ」としみじみとした気持ちになりました。



県大会に参加して

姉崎 功

第八回県民話語り岩室大会に参加させていただき、ありがとうございました。発足間もない月潟おはなしの会の皆様と関係各位の心のこもった“おもてなし”に心から、感謝申し上げます。夜語りも語らせて戴き、貴重な体験を得ました。

今回参加し特に琴線に触れた事について、書かせていただきます。

一、縁あって県内外の民話愛好者と集う事ができ、これ程うれしいことはなく、感謝致します。

二、立石先生の記念講演について

優しさのなかに説得力のあるお話の仕方に触れ、自然と涙が出ました。話し手は聞き手に対し、話し手の愛情を伝え、人と人との結びつきを作る事だと、話されました。私は語る時、ゆっくり語り、話の内容を伝えれば良いと考えて語り始めるのですが、直ぐに上気し、ただただ早く終わらせようと早口になるばかりです。これからは先生の講演内容を少しでも身につけて語って行こうと思いました。

三、語りについて

早速、立石先生の話された事を頭におき、語ろうとしましたが案の定、今までと変わらず早口の身勝手な語り方となり、申し訳ありませんでした。語り終わり別の部屋に行ったら、中野ミツさんが飛び入りで私が語った「ほれ薬」を語って下さいました。大変驚き、きっとこの様に語るんだよと教えて下さったのではと、体が震えました。ありがとうございました。

四、種月寺での語り

特にお杉とお松の伊勢参りの話しは実際に杉と松の木を見せてもらった後での語りだったので、心に染み入りました。又、手作りの心のこもった餅のおもてなしがあり、ごちそうさまでした。

五、帰途、思いがけず八百比丘尼の伝説の地を訪ねることが出来、ありがとうございました。高津家の庭の立派な三本の老松を見ると、本当にまた娘さんが生きているように思われ、可哀想でなりませんでした。

老いて行くことを嘆くのではなく、神様から与えられた命に感謝させていただくことが大切と、つくづく思いました。

高津家の心のこもったおもてなしに感謝し、老松の前で記念写真を撮らせてもらい、高津家を後にしました。

とりとめのない内容になってしまい、申し訳ありません。今後ともご指導の程よろしくお願い致します。



発行者：長岡民話の会

連絡先：0258（34）5240（安部）